Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

織田信長と日本武尊伝説 ―戦国動乱期における信長と武尊再来としての蒲生氏郷をめぐる人文地理学的考察―

川西, 孝男

(Citation)
2022年 人文地理学会大会 研究発表要旨:30-31

(Issue Date)
2022-11-19

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485854

織田信長と日本武尊伝説
――戦国動乱期における信長と武尊再来としての蒲生氏郷をめぐる人文地理学的考察――

Oda Nobunaga and the Legend of Yamato Takeru
－Nobunaga in Sengoku War Era and "Gamou Ujisato as Rebirth of Japanese Hero Yamato Takeru" using Human Geographic Approach－

川西　孝男（国際日本文化研究センター，王立地理学会）
Dr. KAWANISHI Takao F.R.G.S (International Research Center for Japanese Studies, Fellow of Royal Geographical Society, United Kingdom)

キーワード：織田信長、日本武尊伝説、蒲生氏郷、天下布武、天下泰平
Keywords :Nobunaga,Yamato Takeru,Gamou Ujisato,Tenka-hubu(governance by force),-taihei(peace in Japan)

Ⅰ　はじめに　ー信長研究の転換点と「蒲生氏郷」ー

織田信長は「大うつけ」から「天魔」とも称されるように、破天荒な改革者のイメージを持ち、秀吉・家康とともに戦国時代の三英傑の一と見なされるが、これらは軍記作者や宣教師による伝聞・見解に依拠したところも多く、その人物像や彼らの事績の意図にせまるものは少ない。本論は挑戦的試みとして先行研究を土台に、人文学（文学・神話）と地理学（地理・地政学）を包摂あるいは比較検証する人文地理学の視点を用い、この三傑を先導・教導し、天下を実質的に統一、泰平を招来させた"会津百万石のキリシタン大名"として知られる大英傑・蒲生氏郷の事績とその意義を明らかにするとともに、信長そして氏郷の日本武尊伝説との関わりについて例証し、「武尊の再来」たる蒲生氏郷が描いた天下争乱の収束と新時代（泰平の世）の理想について考察したものである。

Ⅱ　織田氏の出自と日本武尊伝説

信長の一族に関する出自は越前説と近江説あるいは両者の折衷説が有力視されるが、ここでは近江説を中心に焦点を当てる。すなわち、織田氏そして家臣団に多く見られる姓氏などから、その発祥を安土近郊に求めるものであり、この周辺には、三上山百足退治伝説そして東国の巨大勢力となった平将門の乱を制した藤原秀郷、さらには古代日本に割拠する豪族を討ち、統一と泰平を招来した日本武尊伝説のゆかりの地が多く、近江一之宮が武尊を奉ることはよく知られる。

Ⅲ　信長と日本武尊伝説

信長の出生地、尾張では織田氏一族の家督争いが続き、信長にも「女（女装）おどり」で放蕩する上述の悪評が流布され、織田家の行く末を案じる家臣団の困惑ぶりは「信長公記」などでよく知られるが、このような信長に十倍とも言われる戦力差の今川氏の大軍に挑ませたものは何であったのかに触れたものは少ない。私はそれを軍神・日本武尊の伝説にあったと考える。武尊が女装して九州の大豪族・熊襲タケルを奇襲・成敗したように、大うつけの悪評を逆手に今川上洛軍を油断させて奇襲を決行、敵将を討ち果たした。この桶狭間の直前に熱田神宮に参詣し己の武運を問うたことが知られるが、この神宮には日本武尊の用いた草薙の剣が奉納されており、むしろ信長はこの神剣（の霊力）を携えて生死を賭けた戦いに武尊の如く智略をもって挑んだと言うべきである。

(1) 織田信長と「天下布武」

その後、信長は美濃を攻略、足利義昭と上洛態勢を整える。この頃、天下布武の印を用い始めたとされるが、中国の故事を用いた信長の武力による天下統一の意志表明と概ね考えられた。しかし、上述の守護神・武尊の影響を考える時、それは「天下に日本武尊の精神を知らしめる」ことであったとも考え得る。上洛時の信長は、織田氏発祥にまつわる安土周辺（蒲生野）に自らの本拠を置くため、当時の支配者たる六角そして蒲生氏に挑むことになるが、ここで武尊の白鳥伝説を彷彿させる鶴千代（後の蒲生氏郷）と出会う。氏郷は信長亡き後、天下布武の実質的執行者そして完成者となるが、この織田・蒲生両氏の若き武尊信奉者がその故郷で会う吉祥は、後年の「氏郷」あるいは「会津若松」の名にも刻まれたと言えよう。

(2) 蒲生氏と「安土城」

鶴千代こと氏郷は人質として岐阜に送られたが、わずか1年で蒲生の地に信長の姫（相応院、「冬姫」）を正室に迎えて帰郷しており、信長が自身さらには武尊の生き写しのような氏郷に大きな信頼を寄せていたことが伺える。氏郷はその後、伊勢を中心に織田軍と共闘したが、彼も桶狭間の信長に武尊の勇姿を描いていたことは想像に難くない。この伊勢そして神宮も武尊伝説とゆかりが深く、景行天皇から東征を命ぜられた武尊は、神宮に立寄り倭姫命から草薙の剣を授けられた逸話がある。信長、氏郷そして前述の藤原秀郷が伊勢神宮を崇敬していたことも良く知られる。

この頃、安土山に信長が築城を始めるが、当地一帯にはかつての観音寺城下の楽市といった自由交易の気風があり、信長はこれを支配地で継承発展させた。さらにキリシタン南蛮文化の影響を受ける中、戦国時代最高峰の城郭・安土城が建立される。眼下に琵琶湖を望む織田氏の故郷・近江に信長は凱旋し、自らの天下布武に進み、蒲生氏は前述の伊勢への要地、日野そして安土城とその周辺を守護した。

(3) 蒲生氏郷と「天下布武」

信長の侵攻は一方で、その苛烈さから次第に反発を生み、敵対武士団だけでなく、寺社、領民からの反抗あるいは武装抵抗を受けたほか、自軍にも離脱や寝返りが相次いだ。これを信長は徹底弾圧したが、有能な家臣の中にも信長軍の行く末や自らの身に大きな不安を持ったことは想像に難くない。ここに至り、泰平を求めた日本国の民心も次第に信長を離れたと言え、天もまた日本武尊の使命を果たす真打・蒲生氏郷に委ねる時を決したと言えよう。

そして本能寺の変へと向かうが、この信長そして明智軍の動静を知り得た安土城の蒲生氏は、変の勃発後さまざまに動き、天下争乱の再燃を防いだ。すなわち明智側との対峙を明確にし、信長の親族を日野城に匿い、伊賀越えで逃げ落ちる家康一行に手を差し伸べ、柴田勝家や秀吉ら旧織田勢の援軍を待ち、反撃（弔い合戦）の態勢を整えていたのである。

Ⅳ　蒲生氏郷－日本武尊伝説の復活－

やがて信長の後継となった秀吉は、この蒲生氏郷に接近し、全国統一を目指し始める。氏郷は再び伊勢に向かうべく、まず亀山城を押さえたが、この地は日本武尊の聖地たる能褒野（古墳）や武尊を身をもって助けた妻・弟橘妃の生誕地があり、氏郷は自らの天下布武への全国出征を日本武尊の復活に見立てた。そして、松阪を統治し伊勢神宮の神領周辺を治め、神宮に寄進し、参詣のための交通網を整備した。当時キリスト教そしてその先進軍事技術や文化に関心を寄せる氏郷が日本古来の神道を崇敬し、仏教など他宗派にも造詣が深かったことは注目され、その先見性と寛容性は、新たな泰平の世を先導・教導する天下布武者にふさわしいものであった。

そして天下統一軍の先鋒として蒲生氏郷は武尊のように先陣を切って戦い、伝説の復活の如く九州そして中部、関東、東北各地の軍勢をことごとく鎮圧平定する。一方で、氏郷にはかつて敵対した武将でさえ見込んだ者は召し抱えるという度量や、軍律に厳しく、長期戦を避けるなど周辺住民にも配慮があり、蒲生氏郷の奥州仕置軍は、天下軍あるいは征夷大将軍の名に真にふさわしく、氏郷の目指す「天下布武」の精神が現れる。すなわち「武（戈）を止めるための戦い」であり、日本武尊とはまさに「日本国は武を止めるを尊しとする」という語義に根差した日本の英雄であり、改新期における太子の「(平)和をもって尊し」とする精神に通じるものである。

Ⅴ　結語

以上のように人文地理学的視点を中心に史料を再構成し、信長そして氏郷の動きを追うと新しい視点が見出された。伝説の日本武尊にその命運を預けた信長が、祖先の地・蒲生野で出会った武尊の復活たる氏郷によって、日本は長きにわたる戦乱から泰平の世に誘われた。まさに戦国乱世に失望した天照大神の岩戸隠れを、氏郷が泰平の世と新たな理想（キリスト教的博愛さらには宗教的寛容、国際的な商業・文化交流など日本国民の躍動への期待）を持って開いたが如くである。

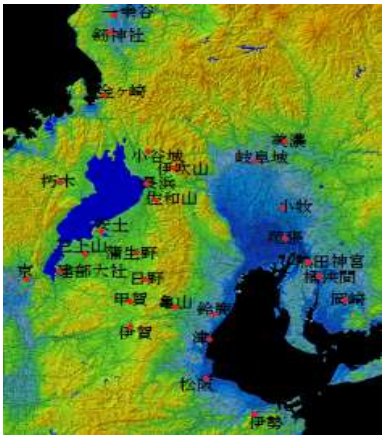

図1　本論主要関係地

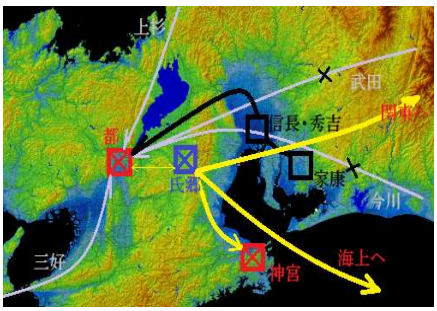

図2　戦国時代における蒲生氏郷の動き（イメージ）

（図1.2は国土地理院デジタル地形図を元に著者が編集。https://www.gsi.go.jp/kankyochiri/Laser_map.html）

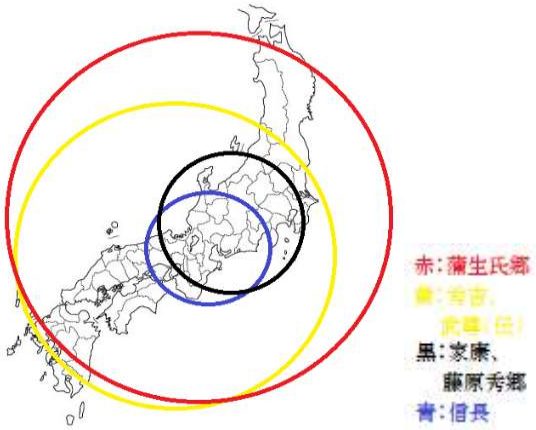

図3　日本統一に関わった英傑の進軍範囲

※参考史料・文献等は学術リポジトリに掲載する。

Ⅵ　主要史料Main Reference in Old Documents

「信長公記」『史籍集覧　第19冊』、1902
「言経卿記」『大日本古記録』、1992
「勢州軍記」、写本、1679、東京大学史料編纂所蔵
「日本書記」、日本古典文学大系、1973
「古事記　祝詞」、日本古典文学大系、1973
「太平記　二」、日本古典文学大系新装版、1998
「将門記　二」、東洋文庫、1976
「常陸国風土記」『風土記』、日本古典文学大系、1973
雲住寺蔵版「俵藤太略縁起」
「氏郷記」『史籍集覧　第14冊』、1902
「蒲生氏郷記」『史籍集覧　第14冊』、1902
塙保己一編「蒲生氏郷記」、『群書類従』、第拾四輯、1893
「蒲生家記」、国文学研究史料館蔵
「蒲生軍記」、国史研究会、1917
「蒲生系図」、続群書類従、蒲生系図二篇
Manoel de Lyra, Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão , 1598
Luís Fróis, José Wicki(ed.), Historia de Japam: v. 1. 1549-1564v. 2. 1565-1578v. 3. 1578-1582v. 4. 1583-1587v. 5. 1588-1593 , in Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976-1984
Fróis, Tratado em que se contêm muito sucinta e abreviadamente Algumas contradições e diferenças dos costumes entre a Gente da Europa e Esta Província do Japão, in Biblioteca da Ajuda, Portugal, 1585
Bernardino de Ávila Girón, Noemí Martín Santo,Relación del reino del Nipón a que llaman corruptamente Japón, in Real Biblioteca del Monasterio de San Lorenzo del Escorial in Spain, 17th c.

Ⅶ　主要参考文献 Main Reference of Books

瀬川欣一「蒲生家盛衰録」上、中、下巻、石岡教文堂、1982
池内昭一「蒲生氏郷」、新人物往来社、1986
幸田露伴「蒲生氏郷・平将門」、改造社、1925
辻善之助「蒲生氏の羅馬遣使について」、『海外交通史話』、p.450-464、内外書籍、1930
滋賀縣蒲生郡役所「近江蒲生郡志　巻三」、1922
安土考古学博物館編「蒲生氏郷」、2005
幸田露伴「蒲生氏郷」、『露伴小説　五』、岩波書店、1992
大路和子「蒲生氏郷の妻」、成美堂出版、1997
葉室麟「冬姫」、集英社、2011
西園寺源透「蒲生忠知公傳」、1933
東京大学史料編纂所「大日本史料第12編之12」
笠谷和比古「信長の自己神格化と本能寺の変」、宮帯出版社、2020
太田牛一「訳注　信長公記」、武蔵野書院、2018
岡本良一編「織田信長のすべて」、新人物往来社、1980
西ヶ谷恭弘編「織田信長事典」、東京堂出版、2005
池上裕子「織田信長」、吉川弘文館、2012
笠谷「徳川家康」、ミネルヴァ書房、2017
野口実「伝説の将軍　藤原秀郷」、吉川弘文館、2001
上田正昭「日本武尊」、吉川弘文館、1960
石渡信一郎「ヤマトタケル伝説と日本古代国家」、三一書房、1988
アビラ・ヒロン, ルイス・フロイス著、佐久間正、岡田訳「日本王国記・日欧文化比較」、大航海時代叢書11、1965
フロイス著、松田、川崎訳「フロイス日本史１～８」、1977
高瀬弘一郎訳「モンスーン文書と日本—十七世紀ポルトガル公文書集」、2006
村上直次郎訳「イエズス会士日本通信上」、新異国叢書１、1969
同「イエズス会士日本通信下」、新異国叢書２、1969
同「イエズス会日本年報上」、新異国叢書３、1969
同「イエズス会日本年報下」、新異国叢書４、1969
ジョアン・ロドリーゲス著「日本教会史上」、大航海時代叢書９、1967
同「日本教会史下」、大航海時代叢書１０、1970
高瀬弘一郎訳「イエズス会と日本１」、大航海時代叢書第II期６、1981
岸野久訳「イエズス会と日本２」、大航海時代叢書第II期７、1988
榎村寛之「伊勢神宮と古代王権」、筑摩書房、2012
新谷尚紀「伊勢神宮と三種の神器」、講談社、2013
川島元次郎「朱印船貿易史」、内外出版、1921
野村尚吾「豪商　角倉了以を中心とする戦国大商人の誕生」、毎日新聞社、1968
度会町史編さん委員会「度会町史」、ぎょうせい、1981
宇田川武久「戦国水軍の興亡」、平凡社、2002
山内譲「豊臣水軍興亡史」、吉川弘文館、2016
振角卓哉「蒲生氏郷伝説」、サンライズ出版、2021
東京大学史料編纂所「大日本史料第12編之12」
吉田小五郎「キリシタン大名」、至文堂、1954
岡倉天心「茶の本」、岩波書店、1921
西村貞「キリシタンと茶道」、全国書房、1948
横田庄一郎「キリシタンと音楽」、朔北社、2000
山田無庵「キリシタン千利休」、河出書房新社、1995

大泉光一「キリシタン将軍伊達政宗」、柏書房、2013
安野眞幸「教会領長崎　イエズス会と日本」、講談社、2014
山崎信二「長崎キリシタン史」、雄山閣、2015
ヴォルピ著、原田訳「巡察師ヴァリニャーノと日本」、一藝社、2008
ヴァリニャーノ著、高橋訳「東インド巡察記」、平凡社、2005
東野利夫「南蛮医アルメイダ」、柏書房、1993
渡辺京二「バテレンの世紀」、新潮社、2017
ジェスティス著、大間知訳「中世騎士」、原書房、2021
川西孝男「聖杯騎士伝説の研究」、関西学院大学出版会、2016
服部早希『伊勢統治時代の蒲生氏郷をめぐる諸問題-新出の発給文書を手掛かりに－』「三重県総合博物館研究紀要」、2021
川西孝男「日本武尊伝説と蒲生氏郷・相応院「冬姫」 ： 氏祖・藤原秀郷からの新視座、将軍・家康の先導的「大英傑」そして天下泰平の完成確認者として／編纂史料及び先行研究検証から」、国際日本文化研究センター（日文研） 主催共同研究発表会、発表要旨・配付資料: 2021年10月9日、於: 日文研本館
https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=29915&item_no=1&page_id=30&block_id=85
川西孝男「蒲生氏郷と聖杯騎士伝説 ： 天下泰平へのヨーロッパ騎士道精神そしてキリスト教文化の影響から」、国際日本文化研究センター（日文研）共同研究発表会、発表要旨・配付資料：2022年（令和4年） 7月9日、於：日文研本館第五共同研究室（京都市西京区）
https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=30411&item_no=1&page_id=30&block_id=85
川西孝男「Avila Girón (-1619) による「Relación del Reino de Nippon a que llaman corruptamente Jappon」写本第2版を中心とした日本における「聖杯」の研究 ：「天文」、天正、慶長そして「令和」における遣欧者の視点、あるいは史料編纂学、グローバル歴史地理学、キリスト教神秘主義的考察」、東京大学史料編纂所特定共同研究発表会、発表要旨・配付資料: 2020年9月12日
https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=29095&item_no=1&page_id=30&block_id=85
川西孝男「ヨーロッパ大航海時代と「 聖杯騎士伝説 」 ： ポルトガル「エスタード・ダ・インディア」そして英蘭東インド会社の 世界進出における人文地理学的考察」、人文地理学会2019年大会 研究発表要旨
https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=28349&item_no=1&page_id=30&block_id=85

Ⅷ. 主要研究協力機関・現地踏査地等Thanks for Institutes & Main Fieldworks

（イタリア、ヴァチカン市国）
ヴァチカン図書館・機密文書館、国立ローマ中央図書館ほか
（スペイン）
エル・エスコリアル、サンロレンゾ王室図書館、スペイン国立中央図書館ほか
（ポルトガル）
国立トーレ・ド・トンボ文書館、ポルトガル国立図書館ほか
（フランス）
サントロペ、サンラフェル、マルセイユ、レンヌルシャトーほか
（日本）
東京大学史料編纂所
京都大学人文科学研究所
国際日本文化研究センター
関西学院大学・図書館
国立国会図書館
滋賀県蒲生郡日野町、安土町（現近江八幡市）
安土城考古博物館
日野城址、観音寺城址、安土城址
建部大社、雲住寺
三重県松阪市、津市、伊勢市、志摩市、鳥羽市
亀山城跡
能褒野王塚古墳
岐阜城
福井県劔神社
伊勢神宮
熱田神宮、宝物館（草薙館）
桶狭間古戦場
名古屋城
松阪城址
鳥羽城址
三重県総合博物館
松阪市立歴史民俗資料館
福島県会津若松市、興徳寺、弘真院、高巌寺
会津若松城（鶴ケ城）
福島県立博物館
山形県米沢城、米沢街道
岩手県立博物館

盛岡城址

九戸城址（福岡城址）

青森県三戸郡新郷村

三戸城址・歴史民俗資料館

宮城県仙台城址

多賀城址

東北大学付属図書館

栃木県唐沢山神社

静岡県日本平

鹿児島県鹿児島市、姶良市、蒲生城跡、蒲生八幡神社

長崎県長崎市、島原市

熊本県熊本市、天草市

京都御所、大徳寺黄梅院、百万遍知恩寺、瑞林院

皇居（旧江戸城）

兵庫県川西市、多太神社、多田神社

大阪府堺市

大阪城

※現地踏査は2019年以前、若しくは2021年10月以降に行ったものである。

本発表は東京大学史料編纂所における、文部科学省所管特定共同研究「モンスーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」（モンスーン・プロジェクト：松方冬子班）及び、国際日本文化研究センターでの同共同研究「貴族とは何か、武士とは何か」（倉本一宏班）の研究成果を活用したものである。